

加納諸平資料

熊谷武至

柿園先生詠秘翠

加納諸平の家集は「柿園詠草」と「柿園詠草拾遺」が刊行されてをり、「続日本歌学全書近世名家家集上」で活字にされてる。

「国歌大系近代諸家集五」では「柿園詠草」だけが活字にされてる。

ここに示す「柿園先生詠秘翠」は、奥に『嘉永二年西春岩崎為平写之』とあるもので、二百首中の百十二首が「柿園詠草」「柿園詠草拾遺」に見えない歌で、これが諸平の歌の追補に役立つことになり、またその作歌年代が判明し、その加朱前の形もわかる。(一)をつけたのが「詠草」「拾遺」にみえるものである。右側△▽内の傍書が「詠草」「拾遺」の歌句である。△▽も()もなく、左右にある傍書は原写本のものである。それらについての註若干は後記する。

一 霧中眺望

遠つ近江千さとのなたを東路の松の葉こしにけふ見つる哉

二 酒

賤の男も聖を友にうたけしてにこらぬ御代の恵をそ思ふ

(三) 夏川

河くまの紅散て水たての青葉しをるゝゆふつくひかな

(四) 茄子

数ならぬ賤か垣内の若茄子実さへ花さへ紫にして

(五) 天

おもふ空やすの河原も有ときく雲の上こそ恋しかりけれ

(六) 起上り小法師

玉光るしたり柳の露の間を靡きも寐はや人しれすして

七 卯花 庵さす片山陰の白つゝしいつ卯花に咲かはりけむ
 八 夏朝 撫子の花の籬の朝涼み夢路の秋やうつゝ也けむ
 九 初秋鳥 きのふこそ夜川立しか泊り鶉のうき瀬なけなる秋はきにけり

二〇 初秋虫 朝顔はしほみ果たるあし垣の夕日にまよふ秋つむし哉

二一 冬浦海 雪に啼浦洲の鳥の声さひて緑りも寒き波の上哉

二二 松 我門の人まつ陰し清ければひとりは千よをしめしとそ思ふ

二三 残雪 春日野の若草山の春の雪いそく緑りを哀れいつまで

二四 あつさ弓春の光にみかゝれて末野の雪やしつ心なき

(一五) 炉辺夜話閑談

心して埋める櫓の薄けふりたゝすを語れさ夜は更とも

二六 恋 稻妻の光に見えて峰の松はかなき色にまよひぬる哉

二七 争恋 夕されは寐くらとめ行村鳥のあらそふ妻にあはて止めや

二八 落花 よしさらは今こん年のきのふこそけふの歎きを花に忘れめ

二九 落葉 人めまつ垣ねのしとゝ朝なゝゝ鳴ては散す薄紅葉かな

三〇 野遊 引馬野の木のみほり原入乱れ春日くらすは都人かも

三一 余花 夏山の青垣淵に影見えてひとり静けき花の色哉

三二 擣衣 打わひて聞とはなしに終夜砧のおとの身にはしむらん更夜の衣

三三 瘡を病ける時にてうちふしける比

いさや川みをさかのほる浮舟のゆられて寒し床の山風

三四 きりくす枕とひよる声のみは露のひるまもかつ聞え

三五 長月の月に見えさす八千草の影と成までやつれける哉

三六 春草 隠家の籬の枯生いつしかと雪の色にもそむく春哉

三七 題略 桜花ちらはちらなん遠つかみ我大君の衣笠の上に

三八 故郷の岡へに立て我見てし富士のみ雪そとはに恋しき

三九 つれくゝと窓打守り竹の子の生さき思ふ五月雨の頃

四〇 芦か散難波の冬を来てみれば鴨の羽かひに初雪そ降わたり今そせん

四一 昔我夕すすみせしあら玉の河の瀬光ほたるとふらん

四二 荒男らか岩垣つくりつくる田も穂に出かたき山の奥哉

(三三) 熊野記の中

四三 熊野にて虫くひ岩を見て

四四 岩ほすら虫はむ計日数へぬ菊の花咲山つたひして

四五 長閑にもけふは降きて神無月風たにしらぬ村しくれ哉

四六 草陰の松の落葉も色かへて夕庭寒き雨のおとかな

四七 何か世はあたる鶉飼の手なれ繩馴て絶せぬ業も有けり

四八 打靡くうら若竹の雫のみさやかに見えて五月雨そ降

四九 友ちとり田上過る声す也こよひもひとりあしろもれとや

五〇 桜さく岡のやかたに見し夢の名残まはゆき朝つく日哉

五一 とりつけし衣の袖の紅に近江の海もこかれける哉

五二 種おろす苗代水に降雨の静けき御代をあふく民かなゆたねま

五三 初せめか袖ふる河の音すみて浮霧なひく朝ほらけ哉なから

五四 題

望 首夏雨 小雨降る田つら又に見ればにたちて新桑の裡葉又つむとる子か袖かきす

(四) 祝 君かため花と散にしますらをに見せはやと思ふ御代の

春哉

(望) 冬月 山寒 紅葉は小雨にくちて弥彦の峰照る月も神さひにけり

(四) 行路落花

きゝす啼野中古道こし方の春も恋しくちる桜哉

望 海辺時鳥

磯の浦や打しく波に月更ておちもかやすき時鳥哉

咒 題

さをしかのつゝ松風音淋しるな野発語也力弱し難也の小萩露乱るらん

咒 初冬 葉かくれに秋を見はてし吳竹の窓打しくれ冬はきにけり

り

吾 寒雁 木からしに三日月落て我門の田つらしくるゝ雁の声哉

吾 題略 しきみつむ暁おきの袖の上に定めなき世のしくれふる也

也

(五) 我埋火ための手なれの琴とかきなつる桐の火桶うらとみたによなれもう

とむな

(五) 湊川底の埋木得てしかな仕ふる道の葉にをせむ

吾 あしやかた雪の上薦あらはにて沖つ千鳥の声を暮行

(五) くれなはといそく契も有物を間遠にひゝく鐘の音哉

吾 花と咲金の山も玉嶋も千とせの坂のふもと也けり

(五) ま草かる荒野と社は思ひしか我やまとなてしこ咲初にけり撫子の花咲にけり

吾 酔すゝむひさこの酒にうかれ出る心の駒は花につな

ん

(五)

深山木の本きりたつと斧とれば空もとゝろに嵐吹也

桃園の下照る路の夕つく日その色ながら霞む月かな

荒熊の出入山の岩木にも秋をかなしむ色あふは見えけり

峰に生る松ときくにも山越ていなはやと思ふ頃にも有

かな

ましらゝの浜のはしり湯わくらはに逢見しかけの移ら

ましかは

木の本にうきてたゝよふ梅の実は数まされとも晴ぬ雨

哉

かのゆくは雁かくゝひかかく計心のとまるおほる月よ

に

夕あらし吹や岡への椎の実のこほれ勝なる我涙かな

真萩ちる朝の雨と成にけりうらみし月の末うらぎのしら雲

海士を舟釣の糸吹夕風に絶すや秋もひかれよらん

はつ雁の鳴て渡りし夕より身にしみはてぬ萩の上風

都鳥あさる瀬清しこよひもや月に吹らん加茂の河風

桜河春ゆく水のなからへて長閑なる世を渡りてしかな

かたへより泉流るゝ音す也去年と今としの中川の水

おしなへて梅の盛りに成しより春風計したしきはなし

天津日のかけさすかたに打むれて榎の実もりはむ鳥も

鳴らん

うきふしもかへと見なして宵々にいやすくぬる草枕

哉

六六

絶かたき日影うすれて夕顔の花のゑまひを見初つる哉

七七

さくら咲入相の鐘のひゞきより月影かをる小初瀬の山

(六八)夏舟

いさげふは花橋の追風にあての湊を朝ひらきせむ

充松と鶯と

うら若き松をしるへに鶯の老せぬ声やもらし初けむ

七〇新樹

影とめし桜やいつら竹川の橋より遠は緑也けり

七一卯花

卯花のかけ見る岸のさゝれ波より来る音も清き夏哉

(七二)あやめ

宮路ゆく袖よりかけてあやめ草けふはかをらぬ里たに

もなし

七三山家水

山川のしからみ越て行水にたくふ心は誰かくむへき

(七四)僧

あはれ世にひゞくもつらき蟬声の雲井にさへは何聞ゆ

らん

七五

朽はてむかれ木のはしと思ひしに枝は中々花咲にけり

(七六)泉避暑

蟬のなく井のへのかつら陰深みもひ取袖に秋風そ吹

七七 秋夕

浮雲の行あひの間より月見えて夕暮寒き秋の色哉

七八 初子規

あたにのみ春をやつしゝ花園に初ね数そふ郭公かな

七九 美人

窓深く匂ふ桜の花ゑみはをらぬ袖にもこほれける哉

(八〇)見恋

若あゆのひれふる姿見てしよりこの川上の家そ恋しき

八二 故郷橘

常世より我や帰りし橘の花散里はしる人もなし

(八三)夏きく

かこひてし氷も露と消る日をいかにたへてか菊の咲ら

ん

(八四)螢

あくたよる夕川風に雨晴て影めつらしくほたとふな

八六 水室

ひむろ守しくや蕨の手をゝりてけふの貢をいくか待け

八七 白

ん 月花も雪もあはれとおもふらんあたし色には染ぬ心を

八八 橋納涼

こなき咲野川の橋いつしかと秋をかけたる夕風そ吹

八九 懐古園

荒はてしかけも家とや鼻のひとり鳴声夜を守るらん

九〇 禱衣

明るまで衣はうたし月影のかたふくからに人そ恋しき

九一 夏虫

夏の日もやゝたけぬらし紅の浅はの小野に秋つとふ也

九二 馬上月

あはれ我手馴の鞭のくま柳打見る月にいとほしの名や

九三 五月雨

くみとらん水こそあらめ五月雨に心をさへやにこしは

九四 五月雨

つへき

九五 川上雪

みつみのみ花とうかひて川水の淀める淀に雪は消つゝ

(九六)故園

古池のひとつ棚橋けた朽て蓮の枯葉に秋風そふく

九七 かり場にて

ともしせし昔やいつらにつゝしの下照る山はよる鹿も

九八 かり場にて

なし

九九 さつをらかさすやまふしのふし柴に一ふさかゝる藤波

一〇〇 の花

かりすてゝ犬よひかへす片岡の尾越の松に夕日さす也

一〇一 滝畑にて

上ひかる檜の若葉の露の上に朝日よそひて藤を匂へる

一〇二

いかさまによりあはせまし藤波の下枝にかゝる滝のし

一〇三

ら糸

一〇元 藤波の花の中ゆく川淀に浅むらさきのかげそよとめる

一一〇 かつ越て春も行らし藤波のみたる、山に鶯のなく

一二 山吹 山吹のうつろひかたに成しよりひとへは露の色と社み

れ

(二三) 閑居董 人しれすすめはすみれの花すらも軒の蓬に隠れてそさ

く

一三 かきつはた

ほともなくぬきかへぬとも杜若時めく色をきぬにすり

てむ

一四 暮春鐘 鶯は鳴つゝをしむ夕暮に春ともしらぬ鐘ひゝく也

一五 更衣 ふりぬれと猶よきゝぬの花染を誰かうへきよりいとひ

初けん

(一六) かへまはくは何をしむらんうつり香の身にしもおはぬ花

の衣を

一七 通書恋 色香するたよりに人やひらかまし梅のさ枝に文は結は

む

(一八) 熊野行幸記のかた

うちなひく真萩の露に風見えて鹿のせ山は霧晴にけり

(一九) 久野侯別所の花の宴に侍りて

二月のけふの足日の花曇りおもへは空もこゝろ有けり

(二〇) 田家春月

影見えし燕やいつら水田より軒はをかけて月そ霞める

(二一) 城 千代しむるみ城の岩垣かたらかに松もねさして苔むし

にけり

(二三) 衣 さ夜更て糸よりほそるともし火の影をたよりにぬふは

たか妻

二三 嵐 ちまた吹あらしをいたみ市人のうりかふ声のかたなひ

きなる

二四 天保十四年の春の初鰯室にて

かを見ゆる城のへの松のしけみより恵あまねき春や立

らん

二五 早春水 あしたつのかへるつはさにかけてしより春とや波の花は

咲らん

二六 九日子日也とて人々とゝもに和歌浦近き山に小松ひく 此日う

らゝとうすかすみしていとけしきよし

かきりなく生る小松に海山の春の緑りも重ねてそひく

(二七) 都若菜 朝風に若なる子か声す也朱雀の柳眉いそくらん

二八 竹林鶯 散つもる竹の古葉は霜なから籬にしけき鶯の声

二九 江上霞 堀江河立や霞の薄衣たてぬき見えて春風そ吹

三〇 行路霞 わけいらん霞の奥に聞ゆ也小雨をさそふ山はとの声

三一 梅留客 うめかゝの深く成ゆく盃にうける心もかきりしられす

三二 久野大夫の後園の梅の花の宴にて

鶯も御笠と申せこの殿の梅のはやしは雨かをる也

三三 ほのもるゝ梅かゝとめて高殿のをすにかゝれる薄霞哉

三四 久野家梅花の宴にて其夜のさま

雲路ゆく月にたくひて梅かゝもいそく斗の春風そ吹

一三 行路花 越てこし山の棊もはなれぬを花ははるかに霞ける哉

一四 花半落 入相の音もさはらぬ片枝さへ夜の間あやふき花の色哉

一五 雨ふる日花見むとてある人のもとをとふらひて

玉まつのかすむ軒はをとめくれは藤のしなひに雨そか
れる

(一六) 三月末つかたわかか浦なる何かしのとのより処にて

かけもなき山もとさして行鷺の翅に靡く夕霞かな

一七 春の歌の中

安御代のますらたけをはいとまあれや宮人さひて桜か
させる

一八 題しらす

鶯もかへり声なる花園の春の別れにまふこてふ哉

一九 旅中時雨

旅にしていつまで袖をぬらすらん時雨は晴る折も有け
り

(二〇)

椎の葉にかれ飯もるとやすらへは又も時雨の雨こほれ
きぬ

(二一) 秋日

霧の上に雁かね鳴て秋の日の傾カタふく空をひとりかも見
ん

(二二) 海上月

沖つ洲に夕るるかもめむれ立て波の穂赤し月や出らん

(二三) 故郷落花

故郷を春しも何にとひつらん人待てこそ花はちりけれ

(二四) 川上にゆく人の別に

とく行て君折かさせ月のせの夕河つらは紅葉ちるらん

(二五) 秋の歌の中

百舌のなく片山かけは暮にけり霧吹風のやむとせしま
に

(二六) 古戦場

駒わたす人影もなし犀川の岸のつかさは片くつれして

(二七) 雪中鷹狩

白鷹の尾鈴小もゆらに行見れば野山の雪は色なかりけり

(二八) 時雨

神無月春を霞むる大空のいつこよりふるしくれ成らん

(二九) 秋田

六月の有明の影に見えそめし田井の早穂は色付にけり

(三〇) 秋雨

夕附日てらしもあへすかき曇り柞か原に村雨そふる

(三一) 冬の始に

神無月立にし日よりあし引の山さへもろき色に見えつ

(三二) 舟中月

浪花人芦の穂舟にさほさせは乱れて清し浪の上の月

(三三) 名所山吹

春田うつ岩手の里のひとへ垣八重山吹の花もこもれり

一 野春月

ゆふひはり落るかたより暮そめて葦咲野の月そ霞める

二 春の歌の中

山越て雁そ鳴なる山風のあらちの桜ひとりかも見ん

三 夕花

夕栄もかなしかりけりかのみゆる尾上のさくら散かた
にして

(三四) 花の岩やのかたかける画に

咲花の岩やのみしめ打はへて風たぬ世をいはふ春か

な

(一六) 夕花

暮かたき色こそ見ゆれあかす思ふ夕の心花もしるらん

(一七) 雉子

おもふとち花見かてらの朝狩にかた野とよもしきくす

鳴也

(一八) 霞

音に鳴て別るゝ雁の泪より花なき里も霞む春かな

(一九) 故郷春

故郷の春をしとへは呼子鳥花に啼まであれにける哉

(二〇) 海辺春望

松鳴や明る筈やの朝霞波もあらさぬ春のいろかな

(二一) 紅葉

秋風にあらしひかねて朝雲のわかるゝ峰は紅葉しにけり

(二二) 山隠すあしたの雲のたゆたひにほのめく色や紅葉成らん

山隠すあしたの雲のたゆたひにほのめく色や紅葉成らん

(二三) 大平翁十七回忌に晧懷旧

窓寒き晧月夜ほのかにもむかしの影の見えは社あらめ

(二四) 霜

くれ竹の末打したり霜冴て書見る窓は明果にけり

(二五) 夜花

あかすのみおもひ捨たる夕やみを朧になして花匂ふ也

(二六) 夏夜

月をさへまねき出たる扇かな風待暮のすきひなりしを

(二七) 崎千鳥

村ちとりよる瀬さためぬ声す也のほれはくたる湖のみ

崎に

(二八) 惜更衣

いとせめて我はそをしき藤波のうつろふ間たに衣かへ

せし

(二九) 春曙

鐘のおとは間遠になりて明る夜の空にしたしき花のいろ哉

一四 立春 君か代のとしの始の空見れば豊旗雲に朝日さす也

一五 七月十五夜に

草むらはよられしまゝに秋立て影はしたなきよはの月

哉

(三〇) つゝし 緑そふ松に夕日の霞ますはつゝしの岡やまはゆからまし

一六 箕面の岩本坊に人々を残しおきて滝見に行て

岩かねの紅葉の朽葉分くれは滝の音す也山もとゝろに

一七 残菊 千代ふへき菊さへ霜にうつろひぬ誠なき世や猶かこつらん

一八 紙 時雨たにおほふともなき袖垣の陰をたのみて残る菊哉

書すさふ筆のすさひはよわらしをうすらにのみもすける紙哉

一九 閑居初冬 冬はきぬさてたに友のとふへきを苔路の菊よしかなやつれそ

二〇 しくれ 雲間もる月より遠に鳴田鶴の子を思ふ空や今時雨らん

二一 箕面の岩本坊に人々を残して滝見に行ける時菊のいと多く咲たるを

二二 待人や面かはりせん滝の糸に山路の菊の千世かけて見

は

(三二) 紅葉 紅葉の別よ何になくさめん花は小蝶をかたみとも見き

夕つく日さすや外山の柞原色の限りとあらしふく也

一五

(三三) 落葉

夕つく日さすや外山の柞原色の限りとあらしふく也

一五

夕つく日さすや外山の柞原色の限りとあらしふく也

夕つく日さすや外山の柞原色の限りとあらしふく也

(一八六) 小鷹狩 △粟津野や
片岡の紅葉乱るゝゆふ風にあかぬ鳥立の名残をぞ思ふ

(一八七) 行かへりあく世もしらぬ御狩のゝ尾花に落る夕附日哉 △日かけ

一八八 むし ふみ分ぬ落葉にそひて虫のねも此頃しけし桐の下かけ

(一八九) 魚 釣すれはうけのまにゝよりく也いをも淵には沈み果

△す
つや

一九〇 題しらす

(一九一) あはれ世の色にもそまぬ松か枝は杖つく計老にける哉
笹の葉を小舟につくりうなる子か心たらひの水遊ひす △せ

も

(一九二) 桜田のひつちのかれ葉雪散て雁かねひゝく朝ほらけ哉

一九三 木の河上の山里に鹿聞にまかりて

山寺に夜すから鹿の声聞けは千種の色は空しかりけり

一九四 嵐吹秋のさくらの薄紅葉たえゝちれと見る人もなし

一九五 虫のねのしけき方よりこほるらん垣つ真萩枝たわみ

つゝ

一九六 冬の歌の中に

朝けふり軒の梢にむすほれてにへさしいそく百舌の声
かな

(一九七) 剣 ともすれはつるきのたかみ取人の遅き心はとくへくも

なし

(一九八) 題しらす

あし田鶴の高行翹我にかせ月の落水とりてこんため

(一九九) 筆 真弓にもほこにもかへて筆とれば国ふりならぬ跡はと

ゝめし

(二〇〇) 閑居霞 △早春 打はらふ柴の網戸の塵計かすめる山はいつこ成らん

以上二百首

右のうち、第一に問題になるのは一四四『立春』の『君か代のとし
の始の空見れば豊旗雲に朝日さす也』である。諸平の編になる「鯨
玉集六編」の巻頭に、これは『浜武元興』で出てゐる一首である
が、もともと諸平の作であつて、中島広足のなかだちで元興に売つ
た一首である。諸平の広足宛の書簡に『さて此歌第二首め以下に入
れてはをかしからず。是非開卷第一と存候処、惜い哉、小弟が歌
也。六編にも先自詠は加入致さぬ心得、よしや入れたりとも、開卷
第一にやはおくべき。さすれば、此歌空しく朽ぬべく、あはれ、千
金許に未来永々うりきりて、六編の巻頭に、かひ主の名を出さまほ
し』『御社友に買人はなきか。御なかだちあらまほし』などとあ
る。(弥富破摩雄「近世国文学之研究」)。

「鯨玉集六編」の板行は嘉永四年九月であるから、嘉永二年筆写
の当時はそれがわかつてゐなかつたのであらう。この二百首がすべ
て筆写の嘉永二年以前の詠であることは明白であるが、詞書によつ
て、もつと詳細に判明するものもある。たとへば、一四四の『天保十
四年の春の初鯨室にて』の『かの見ゆる城への松のしけみより恵
あまねき春や立らん』などもその例である。『鯨室』といふのは、
「鯨玉集」が嘉ばれて、遠い処から歌をよせるものが多く、その歌
稿を五畿七道の棚にわけて整理編集するために専用の部屋を新築し

三首、七年の四十四首と並べて、続いて『霞以下多闕年紀者故不敢次第之』として作歌年代不明の歌が収めてあるが、その年代不明歌で本書にみえるものがある。三二 三五 四 五 七 八 四 三六などで、これらは少くとも筆写の嘉永二年以前といふことがいへる。この場合も歌句に異同があるが、「拾遺」のよつたものが何であつたか不明であつて、「拾遺」と本書の歌との前後は、やはり決定しがたいものがある。

諸平の筆蹟もので『兄瓶』名のものであるが、それがことごとく改名の嘉永元年以降のものといひきれず、それ以前の作をも短冊などに『兄瓶』として書く場合も考へられる。それに対しても本書所収の歌は一つの傍証となることが出来る。

一六四の『古戦場』『駒わたす人影もなし犀川の岸のつかさは片くつれして』は、名歌短冊として取扱はれてをり、「柿園詠草」にもみえ、石川依平の『古戦場』の『ものゝふの命をつゆとあらそひしあら野の末に秋風そ吹く』と並べられて、諸平の代表歌の一つであるが、これも嘉永二年以前の作であることがわかる。

本書は「柿園詠草」「柿園詠草拾遺」に対しては、百十二首の補遺となり、「鯉玉集七編」が両集に対して三十四首の補遺となる以上の歌数をもつてゐる上に、その歌句の異同は「詠草」の七十九首

中二十九首、「拾遺」の九首中二首にわたつてゐる。これは諸平の加朱を示すもので、資料としての価値が大きい。

なほ附記すると、空の

かのゆくは雁かくくひかかく計心のとまるおほろ月よに

は天保十一年成立の年平編の「柿園集」に既にみえる一首であるが、「柿園詠草」に

かのゆくは猶雁ならし春のよの朧月夜もあかすとやゆく

がある。また一芸の

ゆふひはり落るかたより暮そめて堇咲野の月そ霞める

は「柿園詠草」に

くれぬめり堇咲野のうす月夜雲雀の声は中空にして

がある。一六の

くれ竹の末打したり霜冴て書見る窓は明果にけり

も「柿園詠草」に

一むらの竹の葉したりおく霜に書みる窓はしらみそめけり

があるが、これらは加朱とみないで、別歌とみての数字の歌数で示してある。

かうした点については、すべてこれを利用されるむきにおまかせしたい。